



留萌の農業

2024



令和6年（2024年）3月
北海道留萌振興局



留萌農業の概要

区 分	単位	留萌		北海道		A/B
		数値(A)	構成比	数値(B)	構成比	
総土地面積 (R4)	ha	344,587	-	8,342,146	-	4.1%
耕地面積 (R4)	ha	25,800	100.0%	1,141,000	100.0%	2.3%
田	ha	8,400	32.6%	221,600	19.4%	3.8%
畑	ha	17,400	67.5%	919,900	80.6%	1.9%
農業経営体 (総数) (R2)	経営体	744	100.0%	1,075,580	100.0%	0.1%
個人経営体	経営体	664	89.2%	1,037,231	96.4%	0.1%
団体経営体	経営体	80	10.8%	38,349	3.6%	0.2%
農業経営体(個人経営体) (R2)	経営体	664	100.0%	30,566	100.0%	
主 業	経営体	436	65.7%	21,910	71.7%	2.0%
準主業	経営体	22	3.3%	848	2.8%	2.6%
副業的	経営体	206	31.0%	7,808	25.5%	2.6%
総人口 (R2)	人	43,050	-	5,224,614	-	0.8%
農業経営体(総数)のうち世帯員数等 (注1)	人	1,907	-	97,553	-	2.0%
上記のうち60日以上従事した者 (注2)	人	1,685	-	85,665	-	2.0%
主要作物作付面積						
水稻 (R4)	ha	3,900	-	93,600	-	4.2%
小麦 (R4)	ha	1,970	-	130,600	-	1.5%
大豆 (R4)	ha	874	-	43,200	-	2.0%
小豆 (R4)	ha	19,100	-	19,100	-	100.0%
ばれいしょ (R4)	ha	21	-	48,500	-	0.04%
てんさい (R4)	ha	194	-	55,400	-	0.4%
野菜 (R4)	ha	209	-	40,423	-	0.5%
果樹 (R3)	ha	43	-	1,588	-	2.7%
飼料作物 (R4)	ha	15,252	-	584,200	-	2.6%
家畜飼養頭数						
乳用牛 (R4)	頭	14,829	-	842,700	-	1.8%
肉用牛 (R4)	頭	8,966	-	566,400	-	1.6%
農業産出額 (R3)	百万円	17,330	100.0%	1,310,800	100.0%	1.3%
耕種	百万円	6,700	38.7%	545,600	41.6%	1.2%
うち米	百万円	3,970	22.9%	104,100	7.9%	3.8%
うち麦類	百万円	470	2.7%	51,200	3.9%	0.9%
うち豆類・雑穀	百万円	380	2.2%	36,800	2.8%	1.0%
うちいも類	百万円	10	0.1%	72,200	5.5%	0.01%
うち野菜	百万円	1,090	6.3%	209,400	16.0%	0.5%
うち果実	百万円	410	2.4%	7,700	0.6%	5.3%
うち花き	百万円	30	-	13,100	1.0%	-
うち工芸作物	百万円	150	0.9%	46,500	3.5%	0.3%
うちその他作物	百万円	170	-	4,500	0.3%	-
畜産	百万円	10,670	61.6%	765,200	58.4%	1.4%
うち乳用牛	百万円	8,330	48.1%	497,600	38.0%	1.7%
うち肉用牛	百万円	2,220	12.8%	113,100	8.6%	2.0%
うち豚	百万円	0	-	51,200	3.9%	-
うち鶏	百万円	0	0%	38,300	2.9%	0%
うちその他畜産物	百万円	90	-	64,900	5.0%	-
生産農業所得 (北海道H18)	百万円	6,040	-	374,300	-	1.6%
農家1戸当たり	千円	4,070	-	6,333	-	-
耕地10a当たり	千円	17	-	32	-	-

※資料：国土交通省国土地理院「全国都道府県市町村別面積調」、農林水産省「耕地及び作付面積統計」「農林業センサス」「作物統計」「市町村別農業産出額(推計)留萌振興局調べ

※耕地面積の畑には、普通畑、樹園地、牧草地を含む。

※農業産出額には、加工農産物は含まれていない。

※ラウンド計算のため必ずしも合計値は一致しない。

注1：「農業経営体(総数)のうち、世帯員、役員・構成員(経営主を含む)の状況。」

注2：「農業経営体(総数)のうち、農業に60日以上従事した世帯員、役員・構成員(経営主を含む)数」

目 次

1	留萌地域の概況	
	歴史・土地、人口・就業、交通	1
	留萌振興局管内図	2
2	留萌の自然条件	
	地勢、土地、気象	3
3	留萌農業の特色	
	留萌農業のあゆみ、バラエティーに富んだ農業	4
	留萌の農畜産物の概要	5
4	留萌農業の構造	
	農業経営体数と就業構造、耕地面積と土地利用	6
5	農業の担い手	
	認定農業者、農業生産法人、新規就農者	7
	農村女性グループ等	8
	青年農業者、指導農業士・農業士	9
6	農業生産の状況	
	気象概況と作柄	10
	稲作	11
	畑作物、野菜	12
	果樹・花き	13
	畜産・酪農、肉用牛、豚	14
	めん羊、飼料作物、公共牧場	15
	エゾシカ被害	16
7	農村振興等の概要	
	農業農村整備の概要	17
	中山間地域等直接支払制度の概要、多面的機能支払交付金の概要	18
	ふれあいファーム	19
	北のクリーン農産物表示制度（YES！clean）	20
	北海道らしい食づくり名人、エコファーマー	21
8	農業関係機関	
	留萌農業改良普及センター、留萌家畜保健衛生所	22
9	農業関係団体	
	農業協同組合、農業共済組合、土地改良区、農業委員会	23
10	TOPICS	24

1 留萌地域の概況

歴史・土地

留萌地方は、沿岸の鮭漁などを行うため和人が進出した歴史をもち、宝永3年(1706年)に松前藩が増毛場所に家臣を置きました。

その後、寛政年間(1789年頃)に増毛場所を下国豊前に、留萌場所・苫前場所・天塩場所を松前貢に命じて開拓したのが始まりと伝えられています。

明治2年(1869年)7月に北海道開拓使が置かれ、行政区画の変遷を経て、明治30年(1897年)11月に増毛支庁が設置されました。

大正3年(1914年)9月に支庁を留萌町に移し、留萌支庁と改称され、昭和23年(1948年)10月には天塩郡豊富村を宗谷支庁に分離しました。平成22年4月、留萌支庁は、留萌振興局とされ、幌延町が宗谷総合振興局の管轄となり、今日に至っています。



(写真：増毛町の歴史的建造物(旧本間邸))

人口・就業

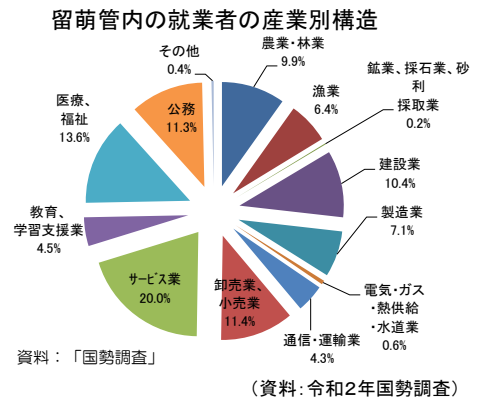
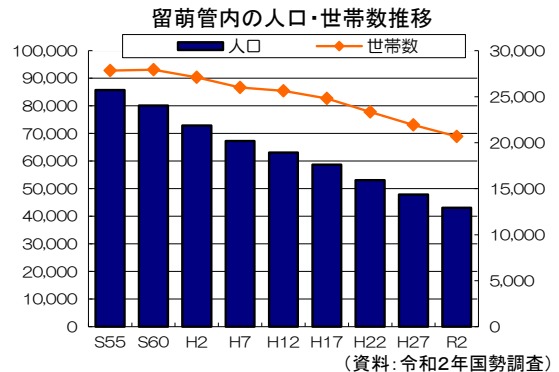
留萌振興局管内は、1市6町1村で構成され、管内の人口は、昭和30年代前半の約13万人をピークに減少が続いています。

令和2年国勢調査によると、管内人口は43,050人で、平成27年に比べ4,862人(10.1%)の減少となっています。

人口減少の原因は、基幹産業である農業、漁業や鉱業の低迷によるもので、若年層を中心とする人口の流出により過疎化と高齢化の進展が著しく、管内全市町村が過疎地域の指定を受けています。また、令和2年国勢調査の65歳以上の高齢者人口の割合は、40.3%となっており、これは全道平均の32.2%に比べても高くなっています。

また、令和2年国勢調査によると、管内の基幹産業は農林水産業ですが、農業者の高齢化等による離農、木材不況、漁業経営の不振などから、第1次産業就業者は近年2割を下回っており、第3次産業就業者が全体の6割超と相対的に高くなっています。

また、製造業では食品製造業が中心で、特にかすのこの加工は全国に占める割合も高く、留萌を代表する特産品となっています。



交通

道路は、国道231号(札幌～留萌)、232号(留萌～天塩)及び主要道道稚内天塩線が沿岸に沿って南北に走り、広域観光ルート「日本海オロロンライン」を形成しています。

また、深川と留萌を結ぶ高規格幹線道路「深川・留萌自動車道」の建設が平成元年から進められ、令和2年3月に全線が開通しました。内陸の上川圏、空知圏との一層の物流拡大、生活・文化・産業経済の交流圏の拡大など、道北の産業経済発展につながる事が期待されています。

鉄道は、JR留萌本線(深川～留萌)と宗谷本線(稚内～幌延～旭川)の2路線となっています。

バスは、国鉄羽幌線(留萌～幌延)の廃止(昭和62年3月)以降、地域住民の交通手段として、ますます重要になっています。

航路は、羽幌港から焼尻島・天売島へのフェリーが運行され、離島住民の重要な交通手段となっています。

留萌振興局管内図



市町村間移動距離及び所要時間表

	留萌市	増毛町	小平町	苫前町	羽幌町	初山別村	遠別町	天塩町
留萌市		20km 30分	12km 15分	45km 55分	53km 1時間10分	73km 1時間35分	96km 2時間5分	115km 2時間30分
増毛町	20km 30分		32km 45分	65km 1時間25分	73km 1時間40分	93km 2時間5分	116km 2時間35分	135km 3時間
小平町	12km 15分	32km 45分		33km 40分	41km 55分	61km 1時間20分	84km 1時間50分	103km 2時間15分
苫前町	45km 55分	65km 1時間25分	33km 40分		8km 15分	28km 40分	51km 1時間10分	70km 1時間35分
羽幌町	53km 1時間10分	73km 1時間40分	41km 55分	8km 15分		20km 25分	43km 55分	62km 1時間20分
初山別村	73km 1時間35分	93km 2時間5分	61km 1時間20分	28km 40分	20km 25分		23km 30分	42km 55分
遠別町	96km 2時間5分	116km 2時間35分	84km 1時間50分	51km 1時間10分	43km 55分	23km 30分		19km 25分
天塩町	115km 2時間30分	135km 3時間	103km 2時間15分	70km 1時間35分	62km 1時間20分	42km 55分	19km 25分	

2 留萌の自然条件

地 勢

留萌管内は北海道の北西部に位置し、西は日本海、北はサロベツ原野、南は暑寒別岳を中心とした増毛山地、東は天塩山地に接した東西約60km、南北が約130kmにわたる南北に細長い地域です。

西側は海岸近くまで丘陵が迫る海岸段丘が随所に見られ、東側の大部分は山岳丘陵地帯が分布しています。

北部は天塩川下流域、サロベツ原野などの沖積平野で、中・南部は羽幌川、小平薬川などの日本海に注ぐ中小の河川に沿って平坦地が分布しています。

1市6町1村で構成される管内の面積は、約3,446km²で北海道の約4%を占め、これは東京都の約1.6倍にあたります。



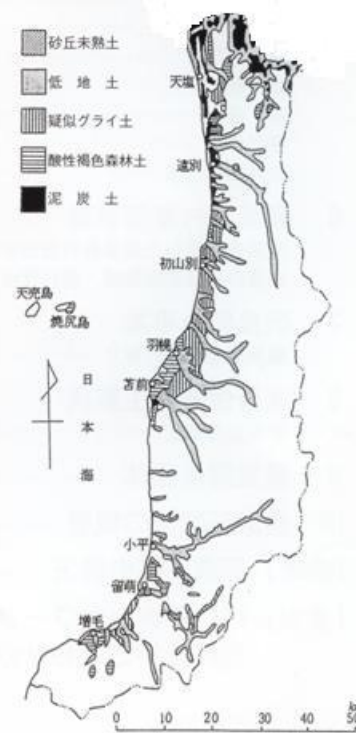
土 地

北部の天塩町の耕地土壌は、天塩川流域や宗谷管内に続く広大なサロベツ原野に分布する泥炭土で大部分を占められています。

これに対して、遠別町以南は中小の河川沿いに平坦地が形成されており、主に細粒質褐色低地土・灰色低地土が分布しています。

これらの土壌はいずれも透水性や排水性などに問題があり、改良の必要性があります。

管内土壌図

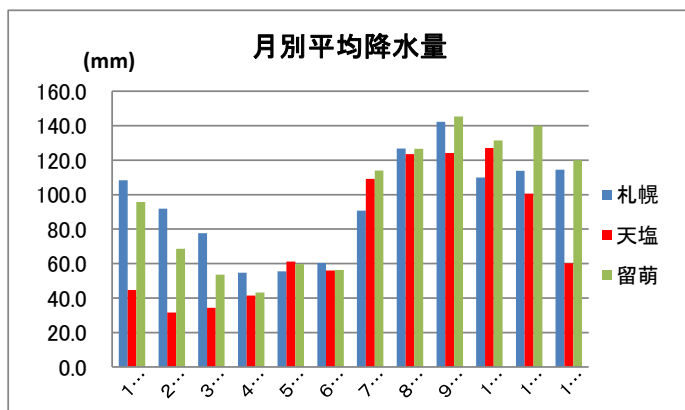


気 象

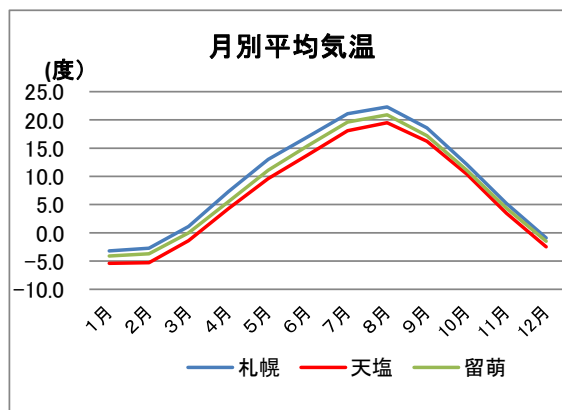
日本海を北上する対馬海流の影響により、同緯度の他の地域に比べ温暖ですが、南北に細長い地域のため、南部と北部では気温はかなり異なります。このことが、稲作、野菜、果樹から畜産に至る様々な農業形態を生む要因となっています。

また、降水量は暖流である対馬海流の北上する日本海に面し、後背部が山岳地帯となっていることから、前線や台風などの影響を受けて、秋から冬にかけて多くなるという特徴が見られます。

冬期間の積雪は平均1m前後ですが、内陸部では2m前後にも達する地域もあります。



(資料：気象庁(1991～2020年の平均値))



(資料：気象庁(1991～2020年の平均値))

3 留萌農業の特色

留萌農業のあゆみ

留萌地方は、昔から留萌川河口の北側にアイヌ人が集落を作って住んでおり、早くから請負人（藩からアイヌ人との交易を任されていた商人）が入り、交易を行っていました。

その後、幕府は北方警備のため北海道を各藩に分領し、警備地としました。留萌には、1861年にマサリベツ（現留萌市春日町）で警備と開墾に着手しています。

このときに稲作の試験栽培をするため開田したのが管内の水稻作の始まりです。それに伴い南部地域にて農民の移住があり、農業が営まれるようになりました。

本格的な内陸部の開拓は明治20～30年代の集団入植により行われ、主に畑作が営まれました。

りんごは、1883年（明治16年）に増毛で苗木300本を植栽したのが始まりです。

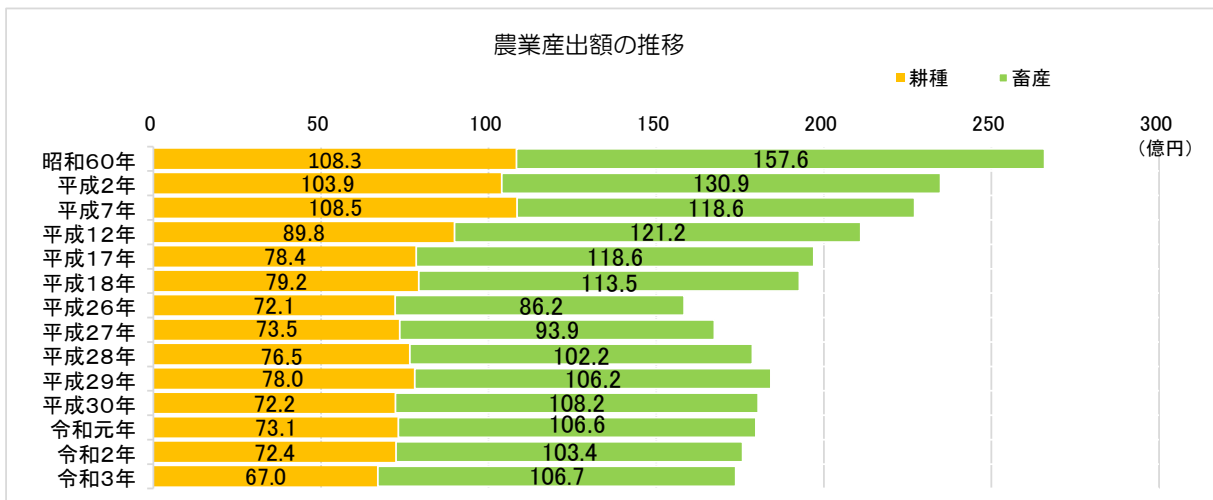


（写真：「日本最北の米どころ」の碑。遠別町）

バラエティーに富んだ農業

留萌地域は日本海に沿って南北に細長く、土壌や地形、気候など南北で異なる自然条件を活かして、稲作、畑作、野菜、果樹、花き、酪農などバラエティーに富んだ農業が営まれており、前菜からデザートまで揃えることができる食材の宝庫です。

管内農業産出額は昭和60年の266億円をピークに減少傾向にあり、令和元年は約180億円となりました。



年	農業産出額	耕種									畜産					
		小計	米	麦・豆類 雑穀	いも類	野菜	果実	花き	工芸 農作物	その他	小計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏	その他
昭和60年	2,659	1,083	819	106	14	76	22	—	36	12	1,576	152	1,167	163	2	—
平成2年	2,348	1,039	693	71	18	189	20	1	31	15	1,309	89	1,098	101	1	—
平成7年	2,271	1,085	739	49	14	216	22	4	29	12	1,186	74	1,062	43	0	—
平成12年	2,110	898	580	54	12	180	31	8	15	19	1,212	105	1,067	36	0	—
平成17年	1,972	784	477	78	11	147	32	12	17	10	1,186	71	1,098	×	×	×
平成18年	1,927	792	469	88	11	147	32	×	×	15	1,135	81	1,035	9	×	×
平成26年	1,582	721	428	54	3	153	40	×	15	×	862	78	755	×	×	×
平成27年	1,672	735	440	49	2	158	47	×	11	×	939	85	825	×	×	×
平成28年	1,786	765	482	45	4	152	44	×	11	×	1,022	99	896	×	0	×
平成29年	1,842	780	486	57	2	153	43	×	14	×	1,062	99	933	×	0	×
平成30年	1,804	722	439	51	2	155	37	×	12	×	1,082	98	955	×	0	×
令和元年	1,796	731	486	58	1	107	37	×	14	×	1,066	222	839	×	0	×
令和2年	1,758	724	458	74	1	119	37	×	15	17	1,034	191	834	0	0	8
令和3年	1,733	670	397	85	1	109	41	3	15	17	1,067	222	833	0	0	9

※H19～25の市町村別の数値は公表されておりません。×は非公開の項目です。（資料：農林水産省「市町村別農業産出額(推計)」）
 ※S60～H18年は転送町を含む。 ※ラウンド計算のため、必ずしも合計値は一致しない。

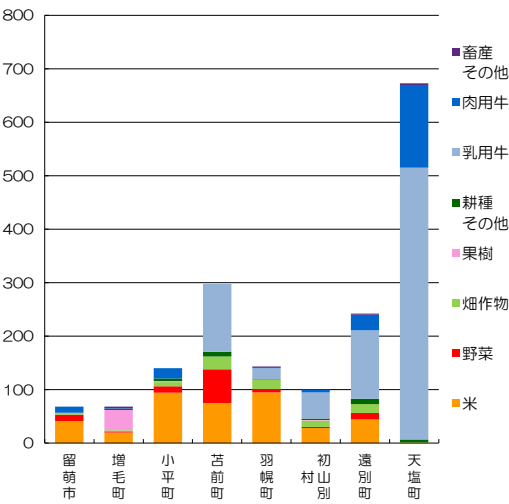
留萌の農畜産物の概要

稲作・畑作・野菜は、留萌市から遠別町まで多種多様な品目が作付けされており、特に稲作は農家経営の主力であるとともに、道内有数の良質米として全道・全国から高い評価を得ています（詳細11p）。米・野菜ともに北限に位置し、気候風土を活かしたクリーンな野菜を生産しています。

また、南部の増毛町では、りんご・さくらんぼ・なし・ぶどう・プルーン等の果樹が栽培されており、観光果樹園や直売も盛んで、Yes!clean 登録の安全・安心でおいしい果樹を生産しています。

畜産は、北部の天塩町における酪農を中心に、経営規模の拡大や近代化が進んでおり、肉用牛やその他畜産物を合わせた畜産全体の令和元年の農業産出全体額は、管内農業産出額全体の約6割を占める重要な品目となっています。

市町村別農業産出額(令和3年)



(資料：農林水産省「市町村別農業産出額(推計)」)

北限のクリーンな野菜たち

かぼちゃ、メロン、スイートコーン、アスパラガス、トマト、ミニトマト、ピーマン、さやいんげん、ねぎ、ほうれんそう、いちご、ながいも、きゅうり等種類が豊富で、クリーンな野菜が生産されています。

るもい逸品



ブレ・サレ焼尻

焼尻島育ちの高品質なサフォーク種(羊)です。外敵がいらないストレスフリーな環境と、潮風(ミネラル)を豊富に含む草を毎日食べて育つことにより、その上質な肉は『羊のサラブレッド』と称されています。



RuRu Rosso (ルルロツ)

デュラム小麦に近い硬さ、コチコチとした食感でゆで延びが遅く、今までの国産小麦にない超強力小麦です。留萌市内の製麺会社でスタに加工され好評を得ています。小平町、留萌市で約26ha栽培しています。



RuRu Rosso
ルルロツ

『小平牛』『茂野牛』『あずま牛』

A5ランクの牛を多数生産している小平牛(小平町・黒毛和種)、ウコンを与えて強く健康に育てられる茂野牛(遠別町・乳用種)、30ヶ月丹念に育てられるあずま牛(留萌市・黒毛和種)は、いずれも生産者の牛や地域への愛情がいっぱい詰まった銘柄牛です。



るもい管内産米

平成20年全国食味分析コンクール金賞、平成22年特別優秀賞受賞。平成29年ゆめびりかコンテスト2017最高金賞。遠別町、初山別村では、もち米の栽培も盛んです。



ましけフルーツの里とその恵み

増毛町では、特産の果物を使用したストレートジュースやジャム、シードル(発泡性のお酒)等が生産されています。

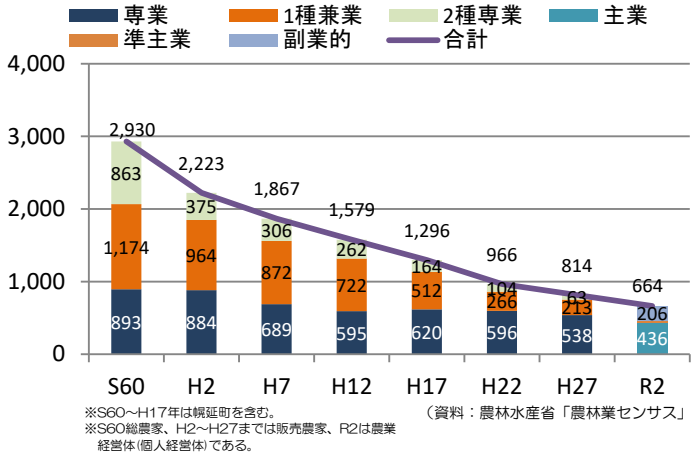


4 留萌農業の構造

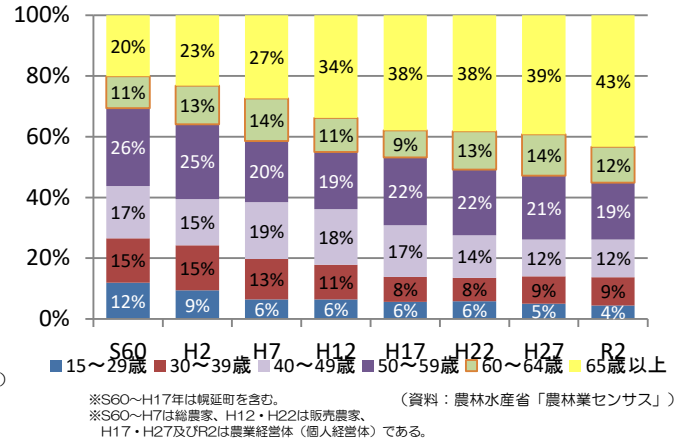
農業経営体数と就業構造

農業経営体数（平成27年までは農家戸数）は一貫して減少しています。また、就業人口も一貫して減少している上、農業就業者のうち65歳以上の占める割合も約43%（全道約40%）と増加傾向にあり、農業経営の高齢化が進んでいます。

農家戸数・農業経営体数(個人経営体)の推移



農業就業人口年齢構成比の推移



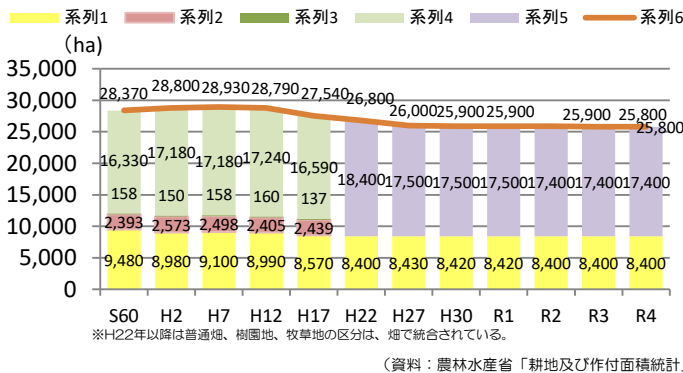
耕地面積と土地利用

令和4年の耕地面積は25,800haです。

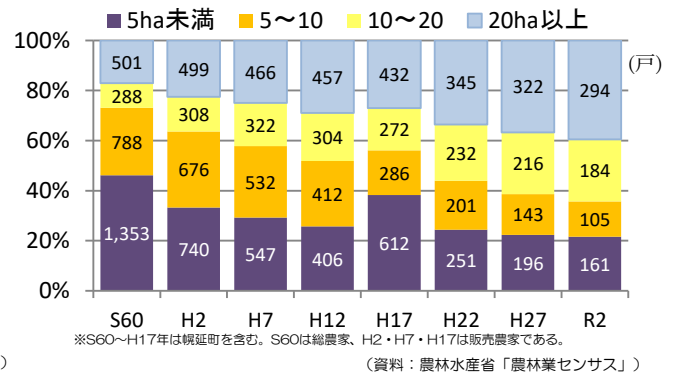
経営耕地面積規模別の農業経営体数は、昭和60年で全体のほぼ半数を占めていた5ha未満の経営体が令和2年には約22%まで減少する一方、20ha以上の経営体が約40%を占めるようになるなど、経営規模の拡大が進んでいます。

令和2年の農地の権利移動面積は1,456haで、令和元年を上回る面積となりました。

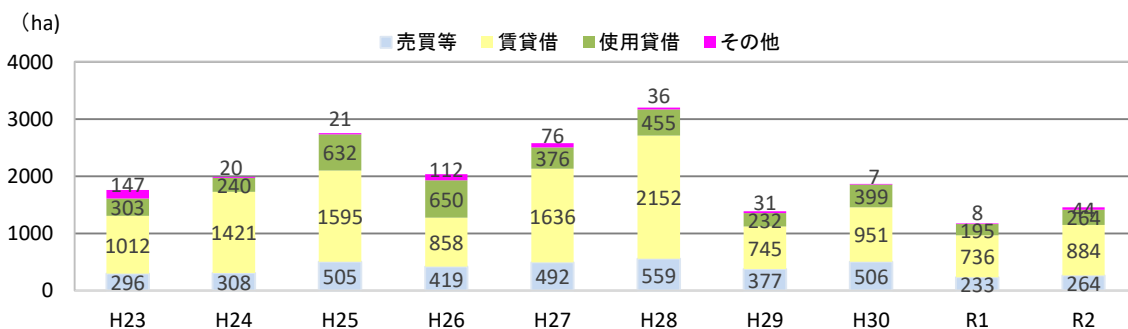
耕地面積の推移



経営耕地面積規模別農業経営体数の推移



農地権利移動面積の推移



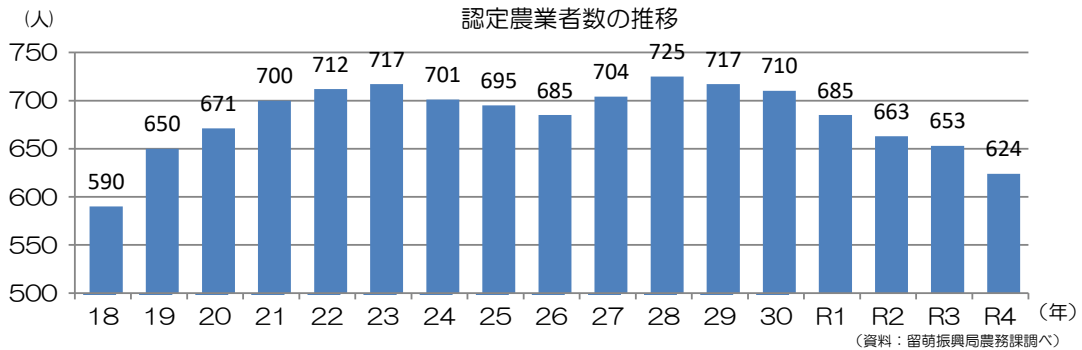
5 農業の担い手

認定農業者

認定農業者制度は、経営改善に取り組むやる気と能力のある農業者が、「農業経営改善計画」を策定し、その計画を市町村が認定する制度です。

意欲のある人であれば、年齢・性別等を問わず認定を受けることができ、地域農業の将来を担う意欲と能力のあるプロの農業経営者を育成する上で重要な制度となっています。

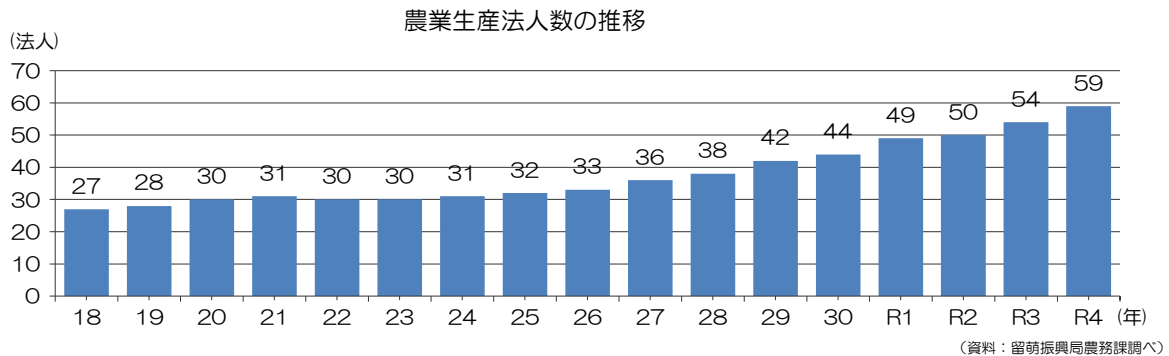
令和4年（2022年）3月現在の認定農業者数は624人となっています。



農地所有適格法人

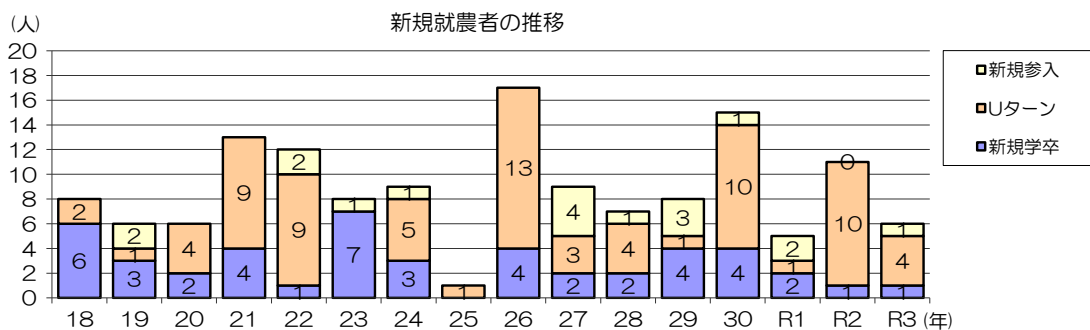
農業経営を法人化すると、簿記の作成による経営管理や信用力の向上、明確な給与・休日や社会保険整備などによって従業員の確保が進めやすいといった利点があり、総じて事業の拡大・多角化などが進めやすくなることが期待されます。

農業を営む法人のうち、農地の所有が可能な法人を「農地所有適格法人」といいます。管内の農地所有適格法人(平成27年以前は「農業生産法人」)は増加基調にあり、令和4年(2022年)1月現在で59法人となっています。



新規就農者

新たに農業に従事する新規就農者は、令和3年は農家以外の出身で農業に就農する「新規参入」が1人、農家出身者が農業以外の職に就いてから就農する「Uターン」が4人、農家出身者が高校や大学を卒業してすぐに就農する「新規学卒」が1人で、新規就農者は5人となりました。



農村女性グループ等

女性農業者は、基幹的農業従事者の約半数を占め、農業経営の参画に加え、地域活動等に積極的に取り組むなど、重要な役割を担っています。

管内でも、学習会、研修会等の交流活動のほか、地場農産物を活用した加工品製造・販売や、農産物の直売を通じた消費者との交流など地域の自然条件、豊かな資源を活かした農村女性グループ等の活動が盛んに行われています。

管内の主な農村女性グループ

市町村名	グループ名	主な活動内容
増毛町	さとやの会(※)	かあちゃん漬けの加工販売
	増毛フルーツ女子(MFJ)	学習会・視察・加工研修会
小平町	小平町農産加工「うまい会」	米こうじ、みそ、ジュースの販売ほか
苫前町	モーモーみるく倶楽部	乳製品を中心とした農畜産物加工技術の習得、酪農技術の学習会
	Windmilk	乳製品加工技術の習得、酪農技術学習会、食育活動
遠別町	農産加工研究会「虹」	農産物に付加価値をつけるための加工研究ほか
	フレッシュ市場「花菜夢」	野菜、花の直売、野菜づくり学習会、直売活動に関わる研修会
	フラワードゥリーム	花苗、鉢物の直売、花栽培学習
	菓子工房 花ぼうろ	大福、赤飯等もち米加工品の加工・販売
	手作り工房「たんぼぼ」	菓子、パン、漬け物の加工・販売
中留萌4町村 広域(苫前町、 羽幌町、初山 別村、遠別 町)	中留萌グリーンネット	学習会の開催(経営・生活技術)、農産加工、仲間づくり
北部3町広域 (天塩町、遠 別町、幌延 町)	乳製品加工研究会「美留来のゆめ」	チーズ、アイスクリームの試作研究

(※)は休止中

青年農業者

管内には4つの青年農業者クラブがあります。

各クラブでは、先進的農業経営者・地域リーダーとして育っていく過程における仲間づくり、共同研究、実践的なプロジェクト学習等に取り組んでいます。

また、管内一円をエリアとした留萌管内4Hクラブ連絡協議会では、夏季交流研修会や管内青年農業者会議（ファーマーストーク in RUMOI）を開催しています。

管内の青年農業者クラブ

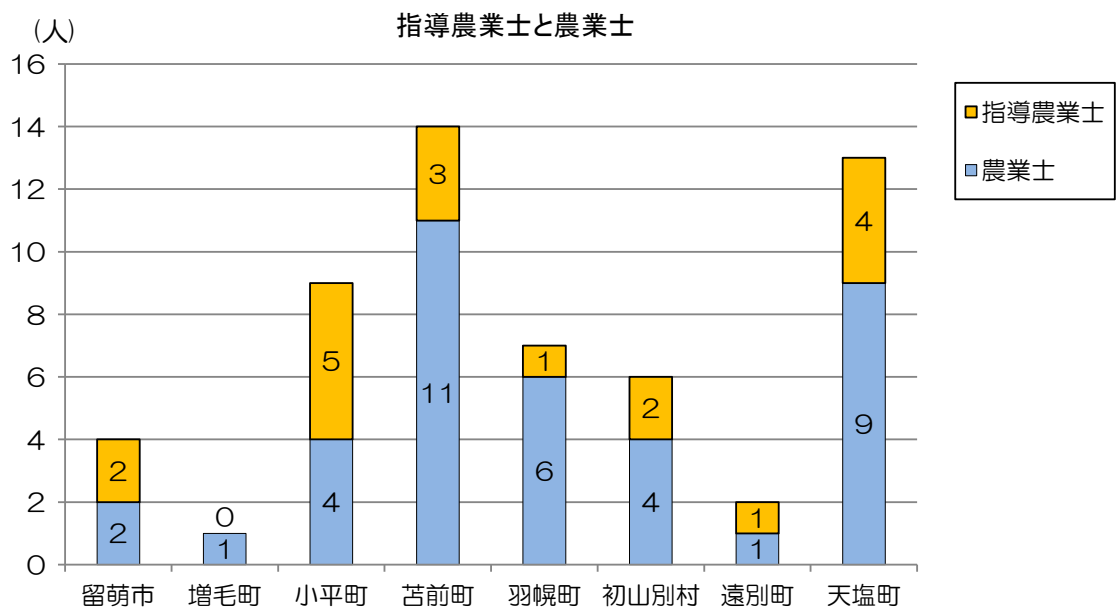
市町村	組織名
増毛町	増毛町果樹協会青年部
小平町	小平町4Hクラブ
羽幌町	ピンクファイト
遠別町	遠別町4Hクラブ

（資料：留萌振興局農務課調べ（令和5年12月現在））

指導農業士・農業士

道では、地域の担い手の育成や地域農業の振興等に関する助言・協力を行う農業者の方を「北海道指導農業士」として、地域農業の担い手として経営改善や地域農業の振興などに積極的に活躍される農業者の方を「北海道農業士」として認定し、その活動を支援しています。

管内では令和5年（2023年）12月現在、北海道指導農業士29名、北海道農業士として40名の方が認定され、北海道指導農業士18名、北海道農業士38名（下図のとおり）が活動されています。



（資料：るもい指導農業士・農業士会）